

青梅市文化財ニュース

第455号

令和7年9月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

キバシリ (スズメ目キバシリ科)

全長は約14cm、1年中同じような場所で暮らしています。現在、西多摩地区では準絶滅危惧種(NT)に指定されています。

「キバシリ」という名前の由来は、「キリキリと登る」という習性からきています。木の幹に縦にとまり、幹を登る姿から「木走」となりました。

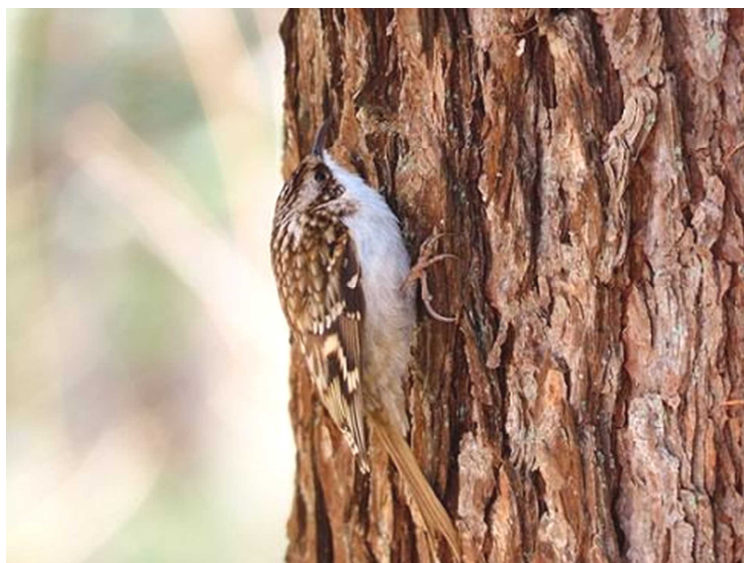
江戸時代前期には御用絵師である狩野常信が延宝5(1677)年に写生をしています。木の幹を素早く登る姿は、江戸時代の人々にも観察され、その行動が鳥の名前の由来として認識されていました。

尾羽を支えにして木の幹に縦にとまり、ジグザグ螺旋状に移動しながら昆虫などを採餌します。木を登り詰めると、近くの木の下の方に飛び移り、再びジグザグ登っていきます。背面の模様が樹木の模様とよく似ているため、じっとしていると見つかりません。くちばしは、細く少し下に曲がっているのが特徴で、頸をひねりながら、くちばしの先を巧みに差し込み、樹皮の割れ目に潜むクモや小さな昆虫を採餌します。

キバシリの主な生息地は、日本全国の山地～亜高山帯を中心とした針葉樹林ですが、北海道では平地でも見られます。繁殖期は標高の高い森林を好みますが、冬季は丘陵地などに移動する個体もいます。

日本野鳥の会奥多摩支部の支部報によると、奥多摩近郊では、山地の標高900m付近から亜高山帯で繁殖期にも生息していることが記録されています。市内では御岳山で、スギの割れ目に出入りして子育てする姿が確認されています。繁殖が終わって秋冬の非繁殖期には、コガラ、シジュウカラ、ヒガラ、コゲラなどと一緒に行動していることが多く観察されます。この頃、低地にも下りてきますので、丘陵部でも観察できます。

巣は、樹皮の割れ目や樹洞などに、枯れ枝、樹皮、クモの卵囊などを詰めて碗型にし、ササや樹皮を細かく裂いて産座に使用します。周辺環境によって巣材も変わるようです。コゲラの古巣や巣箱を利用する事例もあります。巣穴には直接飛び込まず、幹などを螺旋



状に回りながら入ります。

5月～8月の繁殖期になると、標高 900m 付近で多く観察されますが、近年標高の低い丘陵地でも観察されるようになりました。あきる野市の横沢入や、あきる野市内の林道、青梅市友田の丘陵地、青梅永山丘陵ハイキングコース、風の子・太陽の子広場などで観察されることもあります。



キバシリの背中中は樹皮とよく似た模様



樹皮の隙間にあるキバシリの巣穴

近年の文献によりますと、昭和 57（1982）年発行の『青梅市の自然Ⅱ』には「針葉樹に生息するが数は少ない。御岳山で観察できる。」となっており、日本野鳥の会奥多摩支部 1977～1999 目録によると「山地での記録が主であるが、記録数は多くない。丘陵地での観察は狭山丘陵で 1 例のみ」と観察事例は少ない印象です。

2000～2012 年日本野鳥の会奥多摩支部の目録『多摩の鳥』では、報告された記録件数が 37 件と観察例は多くはありません。2013 年～2024 年の報告件数は 80 件あります。その内、5 月～8 月に標高 900m 以下の丘陵地などで確認された数は 14 件ありました。2000 年以降に公表されたデータに基づいて編纂されている『東京都レッドデータブック 2023 本土分』によると「かつては雲取山付近だけだったが、最近では西多摩で広く観察されている。」と年々分布を広げているようです。

<引用文献>

東京都レッドデータブック 2023 本土分

青梅市の自然Ⅱ（昭和 57 年発行）

日本野鳥の会奥多摩支部 1977～1999 年目録「多摩の鳥」

日本野鳥の会奥多摩支部の目録 2000～2012 年目録「多摩の鳥」

日本野鳥の会奥多摩支部 支部報 No. 210 号～No. 280 号

（文責 荒井悦子）